

羽釜借り・出雲市乙立町

令和3年1月19日掲載

収録・解説・酒井 董美 ただよし

イラスト・福本 隆男



語り手 伊藤アキコさん
 (明治38年生まれ)
 収録・平成5年7月4日

あらすじ

とんとん昔があつたげな。たいへんな親方の家と貧乏人の家が近所にあつたげな。その親方の家では下男や下女を使つてにぎやかに暮らしておられるし、貧乏な家では家族が多いけれど食べ物なくて、それでその親方の家の朝飯が終わつたころになると、羽釜を借りに行つていたつて。そしてそれを借りに行くところ、まだ羽釜は洗わずにあるから、その洗わないのを借りて帰つては、また、洗つて持つて来て返していた。そうして貧乏人の家からは毎朝、羽釜を借りに来るので、あるとき、その女中さんたちが、「まあ、こんなおばさんは羽釜借りい毎朝来うが、そつときれいに洗つちよつたらどげなだらかい」と言つて、それから洗つておきました。そうしたら、それからも借りに来るけれども洗つた釜はつきりなので、中の残りがありません。

ん。それから二、三日もしたら、羽釜を返しに来なくなつたそう。親方の家では、「羽釜もどしだり来んだが、なしていただら」と言つて、貧乏人の家へ行ってみたら、みんな死んでいたそう。貧乏人の家では羽釜をだいいにして、ご飯を取つた後を、お茶でも少々も入れて、縁(へり)をシヤモでなでて、その汁は飲んでいた。その汁というものは精(栄養)になるものだからね。それで物をだいいにしなればならないということですよ。それでこぼし。

解説

「あらすじ」として右に掲げておいたが、話の内容が短いので、実際は語り手の伊藤さんの語りそのままを上げておいたこととお断りしておく。QRコードで「民話の部屋」をスマホなどでお聞きいただければ、このことはご理解いただけると思う。ところ、なんとも哀れな話である。貧乏人の家では、金持ちの家の食べ終わった羽

釜についている残り物のご飯粒を食べて、飢えをしのいでいたというのである。かつての貧しかったわが国の生活の一面面をしのばせる話である。

筆者も以前、同類をどこかで聞かせていただいた記憶があるけれども、残念ながらそれがどの地区だったか忘れてしまつて特定できないのは残念である。しかしながら、確かに同じ話は語られていたわけで、案外、かつての農村などで支持されていた話ではなかつたのだろうか。

経済大国となつた現在のわが国の実情からは、あまり考えられない内容ではあるうけれど、比較的最近まで、懸命に働いていても毎日の食事に事欠く、そんな貧しい家庭は意外と多かつたはずである。

したがつて、この話をそれなりに噛みしめて、おごり高ぶりすぎた時代となつている今日、例えばアフリカで飢餓に苦しんでいる人々に思いをいたす謙虚な心の優しさを、わたしたちはぜひ持ちたいものだと思うのである。(元島根大学法文学部教授)



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_201107.html